

読みを深めさせる古典指導

湯目 千津*・下平 武治**

キーワード：徒然草，更級日記，花は盛りに，よき人，自発表現，願望表現，係り結び，心もとなし，指導実践例

はじめに

「何のために古典を学ぶのか」

これは高校生が必ずといってよいほど抱く疑問である。「正解と言うべきものはない。それぞれ自分でその答えを探しなさい」と言ってしまえば、それはそれで一つの答えではある。しかし、「この先生は、自分では古典を学ぶ価値が言えないのに、生徒に教えようとしているのか。それなら…」という声にならない反応も当然起こり得る。

古典作品には、人生に対する先人たちの豊かな知恵と深い洞察が込められている。そこから先人たちのものの見方や感じ方、生き方などを学び、自分の人生をより豊かなものへと変容させていく一助とする。また、自分たちの中に脈々と流れている日本的なもののありようを見つめ、それぞれの立場で次の世代へと継承していく。その個々の営みが、結果として文化・伝統を守り、伝えていくことになるのではないか。それらに耐え得る作品であるからこそ、古典として受け継がれているのであろうし、学ぶ価値もそこにある。ところが、現実には、語句の意味や文法などに終始し、通釈が古典の授業の到達点となっているような感がある。しかし、実はそここそが古典指導の出発点であり、古典を学ぶ第一歩ではなからうか。授業で

扱うことによる限界はあるが、作品の読みを深めていく過程の中で、古典の魅力・面白さの一端なりとも感じ取らせたい。そのためにはどのような指導が効果的なのか、『徒然草』『更級日記』の高等学校での授業実践を基にその可能性を探ってみたい。

1 構成に着目した指導例『徒然草』

(1) 意 図

『徒然草』は構成がしっかりしており、幸い、それぞれの年齢に応じて読みを深めることが可能な作品である。随筆としての『徒然草』は、やもすると作者兼好の個性が強く出ている印象を与えがちであるが、作者自身の姿や考えの明示されている章段は意外にも少ない。控え目に語られている、その奥にあるものをどれほど引き出すことができるのかにより、また、どのように捉えるのかにより、そこに見え隠れする兼好の姿は変わってくる。ここでは「花は盛りに」(第百三十七段)を教材とし、構成をまとめる過程を通して読解を深め、作者のものの見方、感じ方への理解へと導く指導実践例を紹介する。

なお、この章段の構成については様々な論が注釈書等で述べられているが、ここでは次のような三段落構成(大きくは二部構成)により考えていきたい(前半部本文引用は、右文書院「徒然草 説話(古今著聞集 十訓抄 宇治拾遺物語 古事談 今昔物語集) 枕草子」による)。

2009年11月30日受付

* 千葉県立実籾高等学校長 国語科教育法

** 江戸川大学 マス・コミュニケーション学科教授 国語科教育、日本文学

前半部

第一段落 「花はさかりに、～よそながら見ることなし。」

第二段落 「さやうの人の～祭り見たるにてはあれ。」

後半部

第三段落 「かの棧敷の前を～戦の陣に進めるに同じ。」

(2) 展開 発問により流れをつくる

語句の意味や用法、文法などの指導はもとより、通釈まで終了した段階での展開とする。生徒への発問を繰り返しながら内容を整理し、構成をまとめることにより、作者のものの見方・感じ方をたどらせることを目標とする。発問については、本文中から指摘する形で答えられるように意図した。生徒にも取り組みやすいものとなるであろうし、何よりも、生徒が自分自身目で本文を見直すこととなり、更にはその過程を通して再度「花はさかりに」の世界を自分なりに構築することにもなると目論んでのことである。

〈発問〉

① 冒頭に「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。」とありますが、作者は満開の桜や満月を見ることを否定しているのでしょうか。

⇒ 否定していない。作者が否定しているのは、「～のみ見る」ことであり、満開の桜や満月を鑑賞する従来の見方を否定しているわけではない。作者は、満開の桜や満月にしか美を見いだそうとしない、「かたくななる」態度を問題としているのである。後出の「かたくななる人」には「教養のない人」「情趣を解さない人」といった脚注が付せられている教科書もあるが、やはり本義の「ある方向に思いや考えが偏ってしまい、判断が広くできない状態」、つまり「花はさかり」「月はくまなき」という通念に縛られている態度を批判したものと見るべきであろう。

② それでは満開以外に、どのような状態の桜

を作者は見る価値があるとしているのでしょうか。

⇒ 「咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭など」

③ では、この「咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見どころ多けれ。」の根底には作者のどのような考えがあるのでしょうか。

⇒ 「万のことも、始め終はりこそをかしけれ。」

④ さて、ここで「花はさかり」に対するものとして作者が挙げたものは、従来の伝統的な考え方に反するものでしょうか。

⇒ 反するものではない。「たれこめて春の行くへ知らぬ」と『古今集』の和歌を引き、「歌の詞書にも」と例を挙げているのは、和歌で培われてきた伝統の世界を踏まえ、文章化したことを示すものである。ただし、作者の挙げたものは、いたずらに王朝美を受容したものではなく、物事の推移の中で兼好自身の目が捉えたものであり、結果として伝統の世界に根ざしたものであったということである。

⑤ 作者は「万のことも、始め終はりこそをかしけれ。」と一般論化したすぐ後に「男女の情け」について書き及んでいます、「花」や「月」に対してこれを挙げた意図はどのようなものと考えられるのでしょうか。

⇒ 「月」や「花」は、「雪月花」「花鳥風月」などという言葉に代表されるように、自然の美を象徴するものとして日本の伝統の中に深く根差している。その自然に対する「人の世のもの」つまり、「人事」、その中でも最も人間的なものが吐露される場として捉えていよう。

⑥ 次に作者は「すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものかは。」と問題を提起していますが、「目にて見る」見方に替わるものとして、作者自身はどのような鑑賞の仕方を提示しているのでしょうか。

⇒ 「春は家を立ち去らでも、月の夜は閨のうちながらも思へる」

「目にて見る」に対する表現として「思へる」を指摘させてもよからう。視覚による鑑

賞法に対し、心の中に思いを巡らしその姿を思い描くという想像力を駆使した鑑賞法を示している。

- ⑦ では更に、「よき人は」と具体的に論を進めています。ここで「よき人」と対照的に挙げられているのはどのような人でしょうか。
⇒ 「片田舎の人」

「よき人」に対するものとしての「片田舎の人」であり、決して辞書的な意味で用いられているわけではない。『徒然草』の中で「よき人」にどのような意味付けがなされているのか、これを機に確認するのもよいのではないか。『徒然草』を読んでいく上で「よき人」は大切なキーワードの一つである。

- ⑧ では「よき人」と「片田舎の人」の鑑賞態度を端的に表している言葉は、それぞれ何でしょうか。
⇒ 「なほざりなり」と「色濃く」

ここでの「なほざりなり」は「色濃く」に対するものであり、口語訳もそれに沿うものとなるよう、注意した方がよい。

- ⑨ 「よき人」の「なほざり」に「興ずる」鑑賞とは、具体的にどのような態度で見ることなのでしょうか。
⇒ 「よそながら見る」

つまり、対象との間に距離を置き、そのものを客観的に見ようとする態度である。「花の下には～雪には下り立ちて跡つけ」という「色濃」き味わいは、現代でもよく見るところである。

- ⑩ 第二段落冒頭の「さやうの人」とは、どのような人を指しているのでしょうか。
⇒ 「片田舎の人」

- ⑪ では、この「さやうの人」つまり「片田舎の人」に対するものとして、どのような人が挙げられているのでしょうか。

- ⇒ 「都の人のゆゆしげなる(人)」

「ゆゆしげなる人」には及ばないものの、やはり「さやうの人」に対する人々として「(都の人の)若く末々なる(人)」「(都の人の)ゆゆしげなる(人)の後ろに候ふ(人)」

をも挙げ、それらの人々の「ゆゆしげなる人」に準じた見物の態度にまで触れている。

- ⑫ では、この「都の人のゆゆしげなる(人)」は、一言で言えばどのような人でしょうか。
⇒ 「よき人」

⑦において「よき人」と対照的な存在として「片田舎の人」(＝「さやうの人」)を確認した段階で、それぞれどのような人々を指しているのか本文中から指摘させ、その内容を把握させるのも一つの方法である。何れにしても都会的・貴族的意識の体現者である「よき人」と、地方的・庶民的意識の体現者である「片田舎の人」との対比の中で、理想的なあり方を描き出そうとしている点を押さえさせたい。

- ⑬ それでは先ず「さやうの人」つまり「片田舎の人」の場合ですが、「祭り見しさま、いと珍かなりき。」とここに過去の助動詞「き」が使われているのは何故でしょうか。

- ⇒ 「片田舎の人」が実際に祭り見物している様子を、作者自身が目にした事を意味する。これは、具体的な事実に基づき論を進めていこうとする作者の姿勢を示すものであり、以降の展開に重みを増さしめている。ここは、文法の確認から導けば「き」の用法を理解させる上で効果的である。

- ⑭ では「片田舎の人」の祭り見物の様子を実際に見た作者は、どのような感想を持ちましたか、その作者の考えが端的に示されている文はどれでしょうか。

- ⇒ 「ただ、物をもみ見んとするなるべし。」

祭りの雰囲気や情趣を味わおうとしない、即物的な「片田舎の人」に対する痛烈な批判である。

- ⑮ このような「片田舎の人」の祭り見物に対し、先程の都の人々の態度を作者はどのように見ているのでしょうか。

- ⇒ 「いとも見ず」と「わりなく見んとする人もなし」

- ⑯ では、この「いとも見ず」「わりなく見んとする人もなし」という都の人々の態度は、今までまとめてきた第一段落中のどの部分と

内容的に一致するでしょうか。

⇒ 「なほざり」に「よそながら見る」

その場にいながら視覚には依らず、祭りのかもしだす雰囲気の中にゆったりと身を置き、視覚以外の感覚を鋭敏に働かせてその様子を思い描く、あるいは見えない部分を想像力で補うのである。

⑰ それでは、作者自身は祭りの日の情趣をどのような点に見いだしているのでしょうか。先ず「明けはなれぬほど」と祭りの当日のある時に目を向けていますが、ここに対応しているのはどこでしょうか。

⇒ 「暮るるほど」

⑱ 「明け離れぬほど」に「暮るるほど」を対応させ、そこから対象を捉えようとする手法は、第一段落のどのような考え方につながるのでしょうか。

⇒ 「万のことも、始め終はりこそをかしけれ。」

⑲ 第二段落の最後で「大路見たるこそ、祭り見たるにてはあれ。」と作者は言い切っていますが、「大路」の何に祭りの情趣を「見」るのでしょうか。今までまとめてきたことを参考に考えてみましょう。

以上、第一、第二段落についての発問例を挙げたが、このような発問を繰り返しながら内容を整理し、構成を板書またはプリントなどで示して作者の考えをたどらせる。参考までに、次頁に板書例を掲げておく。

(3) 鑑賞

「花はさかりに」の章段は『徒然草』の中では珍しく長文である。饒舌になった兼好が語りたかったことは何であろうか。第一段落で繰り返し述べられていることは、自然との関わりの中で「なほざり」に「よそながら見る」態度であり、「思へる」ことにより心で美を享受する姿勢である。そしてこの考えは、第二段落で「祭り」という人事に置き換えられ、再び示されている。「なほざり」に「よそながら見る」態度は「ねぶりて、いとも見ず」という姿になり、「わりなく見んとする人

もなし」という状況を呈する。「ねぶりて」皮膚で祭りの空気を感じ、心に「思」って楽しむ。そして、物事の移り変わりの中に「あはれ」を感じ取る。つまり「ただ物をのみ見んとする」ような、視覚・触覚などに頼る直接的な美の享受ではなく、「思へる」と想像力を駆使することにより、より豊かな真の美の享受を理想とする。このことが繰り返し語られているのである。しかも、「祭り見しさま、いと珍かなりき」と過去の助動詞「き」により、具体的な事実に基づいた叙述であることを示している。絵空事ではないだけに、「さやうの人」つまり「片田舎の人」への批判はより厳しいものとなっている。

祭りの日に「棧敷の前を」「行き交ふ」人々を見ていて、誰もが逃れられぬ「死」へと兼好の思いは及んで行く。眼前の「行き交ふ」人々もさることながら、すべての物事の推移の中に「あはれ」を感じ取る心のありようは、必然的に「死」に行きつくものであろう。その「死」の必然性を見据えた上で、現在の「生」を「ありがたき不思議」と捉えているのである。そして、そのような「ありがたき」身でありながら「しばしも世をのどかに」思う処し方に接し、苦々しい思いを禁じ得ない。「その死に臨めること、戦の陣に進めるに同じ」と言っているものの、兼好は「死」を「人」と、さらに言えば「生」と対峙するものと捉えてはいない。人の生と不即不離にあるものと見てゐる。「死」が根底にあるからこそ、この世の「美」をいとおしむのであろう。

このような作者の姿勢に思い至ると、冒頭の「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものは。」を、果たしてその言葉通りに受け取ってよいのだろうかという疑問が生じる。「万のことも、始め終はりこそをかしけれ。」と言い、「さかり」以外にも積極的に美を見いだそうとする姿勢を示しているが、兼好自身が志向し、真の美と認めていたものは、やはり「さかり」の花であり「くまなき」月であったろう。ただし、それは「花はさかり」「月はくまなき」という形骸化した通念によるものではない。その形骸化を否定しあらためて花や月の諸相を肯定的に認めたからこそ、認識

【板書例】

第一段

【月や花 ⇨ 自然美】

(あり方)

「花は盛り、月はくまなきをのみ見るものは。」

- ・ 作者兼好の提起
- ・ 満開の桜や清月 Ⅱ 王朝の美、伝統的鑑賞法
- ・ その他の鑑賞法

花：「咲きぬべきほどのこずゑ」や「散りしをれたる庭」⇨「見どころ多けれ」

月：「むら雲隠れ」や「木の間に隠れに見え隠れする際」⇨「またなくあはれなり」

一般論化

「よろづのことも、始め終はりこそをかしけれ。」

※ 参考例 「男女の情け」

(見方)

「すべて、月・花をば、さのみ目にて見るものは。」

- ・ 作者兼好の提起

「春は家を立ち去らでも、月の夜は團の内ながらも思へる」

「目」によらない鑑賞法

「よき人」——「なほざりなり」

あつさりとした味わい方

「片田舎の人」——「色濃く」

あくどい味わい方

対照的な鑑賞態度

理想的な鑑賞法

- ・ 「思へる」
- ・ 「なほざり」に「よそながら」見る

即物的な美の享受ではなく、想像力を駆使した見方

第二段

【祭り ⇨ 人事美】

(見方)

(具体的事実)

「さやうの人の祭り見しさま、いと珍かなりき。」

↑ =

片田舎の人 —— 「ただ物をのみ見んとするなるべし」

「都の人のゆゆしげなるは、ねぶりて、いとも見ず。」

↑ =

よき人 —— 「いとも見ず」

(都の人の) 「若く夫々なる」

「わりなく見んとする人もなし」

「人の後ろにさぶらふ」

「なほざり」に「よそながら見る」

(趣のあり方)

祭りの日の「明け離れぬほど」に見る情趣

「暮るるほど」に見る情趣

—— 「あはれなれ」

↑ =

「始め終はりこそをかしけれ」

し得た満開の桜であり満月なのである。直截的に視覚で捉える「さかり」の美はそのものを表層で捉えた美であり、いかにも底の浅い、その場限りのものとなってしまう。『古今集』に代表される王朝の伝統世界に憧れる兼好は、一面、中世に生き「死」の必然性を見据えている人でもあった。その人が求めるものは、そのものの諸相におけるそれぞれの美を背景とした上での「思へる」世界における満開の桜であり、満月であったろう。敢えて冒頭「花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。」と言いつつ兼好その人の心を今一度思い遣るべきではないか。

2 表現の違いに着目した指導例 『更級日記』

(1) 意 図

「更級日記」は、本格的に中古作品を学習して行く足掛かりとして「古典」「古典講読」を中心に、多くの教科書に採られている。しかし、その教材として採録されている部分は、約四十年間にわたる生涯のごく一部に集中している。具体的には、冒頭の門出の部分と、物語に憧れ『源氏物語』を手にして読み耽っている夢みがちで多感な少女時代を回想しているところである。

ところで『更級日記』は一人の女性の精神史であり、教科書ではおおむね次のように紹介されている。

作者五十二歳の年以後間もなく書かれたと推定される。父の任国上総から上京する十三歳当時に筆を起し、京の生活、宮仕え、結婚後の生活、夫の死後と、ほとんど一生にわたる生活を、晩年になって回想的に書いたものである。(東京書籍「精選古典」による)

また、文学史上では次のように評価されている。

幼いころ草深い東国で物語にあこがれて育った作者が、きびしい現実に直面していく中で夢に破れ信仰に生きようとするまでの、十三

歳から五十二歳にいたる四十年間を回想し、その魂の遍歴を記したのが『更級日記』です。作者の菅原孝標女は『蜻蛉日記』の作者の姪に当たり、全編に夢を追いかけて描く感傷的気分があふれ、また信仰に徹しようとして徹しきれぬ心のゆらぎの中に、衰退してゆく貴族社会の気分が反映されています。(桐原書店「詳解日本文学史」による)

作品・作者のこのような本質を少しでも伝えるためには、作者の四十年間における節目ごとの心情表現を見、そこから作者の魂の遍歴を読み取らせる事が肝要となる。資料としては、例えば、年譜と対照させて本文抜粋を掲げ、作者自身が来し方にどのような感慨を抱いているのか、わかるような資料などが生徒には理解しやすかったようである。

さりながら、授業で扱う以上、可能な限り教材として与えられた本文の読解を深めさせてこそ、このような補助資料も生きてくる。これは冒頭の門出のくだりと、帰京後の物語に耽溺している姿を描いたくだりとを併せて取り上げ、そこにある表現の変化を主な手がかりとして、行間にある作者の心情を汲み取る指導実践例である。

なお、教科書により採られている部分に若干の違いが見られるが、ここでは次の範囲とする。

〈門出〉

東路の道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、

(中略)

車に乗るとて、うち見やりたれば、人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。

〈源氏物語を読む〉

かくのみ思ひくんじたるを、心も慰めむと、心苦しがりて、母、物語など求めて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。

(中略)

盛りになれば、かたちも限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顔、宇治の

大将の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなく、あさまし。
(明治書院「新精選古典」による、以下同じ)

この二つの章段の時間的な隔たりはたかだか一年程であり、四十年という日記の世界から見れば、寸陰に過ぎない。しかし、この間にも微妙な表現の違いが見られ、作者の心の變の奥を覗うことができる。「物語といふもの」の存在を知らされてから「夕顔」や「浮舟」といった女性たちに憧れ、「源氏物語」の世界を夢見ていた作者の、物語を軸とした自己の変遷のその捉え方によって、「まづいとはかなしく、あさまし」という言葉の重みを知ることができる。

(2) 表現の違い(その一) — 自発表現

二つの章段を見比べて見ると、物語に関する記述に次のような違いが認められる。

〈門出〉

世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉・継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしきさまされど、我が思ふままに、そらにいかでかおほえ語らむ。いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を作りて、……

〈源氏物語を読む〉

紫のゆかりを見て、続きの見まほしくおぼゆれど、人語らひなどもえせず。たれもいまだ都慣れぬほどにて、え見つけず。いみじく心もとなしく、ゆかしくおぼゆるままに、「この源氏の物語、一の巻よりして、みな見せ給へ。」と、心のうちに祈る。親の、太秦にこもり給へるにも、異事なく、このことを申して、出でむままにこの物語見果てむと思へど、見えず。いと口惜しく、思ひ嘆かるるに、をばなる人の田舎より上りたる所に渡いたれば、……

東国にいる頃、物語というものの存在を知らされた作者は、姉・継母などが断片的に語るものを聞くという、受け身的な立場でしかなかった。そして、物語を読みたいと思う気持ちは強くあるものの、都から遠く離れた上総の地で、求める対象も漠然としている状態であった。蓋し、「物語」の実物を見ていないと考え得るので、これも当然のことであろう。それに比べ、上京してからは自分の意志で、文字を逐って物語を読んでおり、物語への関わり方ははるかに主体的・積極的なものへと変貌している。また求める対象も具体的かつ明確になっている。更には、東国にいた時とは異なり、物語は求め得る状況にある。つまり、自分の手の届く範囲にありながら得られない、そのもどかしい、満たされない折の心情表現に、「おぼゆ」「る」という自発表現が用いられているのである。

この自発表現については、文法書によりその規定はまちまちであるが、少なくとも高等学校で扱う文法の段階では、「おぼゆ」に自発の意味を認めてよいのではないか。「門出」の章段において、「おぼゆ」は「そらにいかでかおほえ語らむ」とも用いられているが、併せて「おぼゆ」の用例を整理すればよいところである。

『源氏物語』を求め、手を尽くしても得ることができず、渴望している心情に自発表現が用いられていることは、『源氏物語』に対する作者の思いが、それだけ胸の奥から沸き上がってくるようなものであり、自然な感清の発露であったという事を示している。

(3) 表現の違い(その二) — 係り結び

係り結びは平安時代に最も法的に現れたとされている。そして、用法は疑問・反語の「や(やは)」「か(かは)」と強意の「ぞ」「なむ」「こそ」に大別されている。現在における「ぞ」「こそ」の使い方及び「なむ」の消滅を考え合わせ、強意の係助詞には「なむ(弱) — ぞ — こそ(強)」という使い分けがあったと考えられている。これらの強意の係助詞と疑問・反語のそれとでは、そこに至る作者の意識の違いはあるものの、反語も疑問の形

を借りた一種の強調表現と見ることができる。

さて、疑問は叙述の関係で必然的に用いられるものであるが、強意や反語などの強調表現は作者の感情の振幅が表出したものである。そのような観点から「門出」と「源氏物語を読む」の章段の強調に関わる係り結び表現を指摘してみると次のようになる。

〈門出〉

姉・継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、我が思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。

〈源氏物語を読む〉

源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将・とほきみ・せり河・しらら・あさうづなどいふ物語ども、一袋取り入れて、得て帰る心地のうれしさぞいみじきや。

はしるはしるわづかに見つつ、心も得ず、心もとなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人も交じらず、几帳のうちにうち伏して、引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。

(中略)

物語のことをのみ心にしめて、我はこのごろわるきぞかし、盛りにならば、かたちも限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、光の源氏の夕顔、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなく、あさまし。

特に「源氏物語を読む」では、物語を軸として心理の節目となっている部分に係り結びが用いられており、「心地」「心」という言葉を併せ用いて直截的にその折の心情を表現している。その折々の表現について今少し詳しく見てみる。

- ・得て帰る心地のうれしさぞいみじきや。

ここは内容的には「得て帰る心地いみじくうれし。」という部分である。「うれしさいみじ」と倒置にしたうえに係助詞「ぞ」により「うれしさ」

を強調し、更に詠嘆の助詞「や」を組み合わせて、憧れ続けた『源氏物語』全巻を得た嬉しさが並々でないことを表している。当時、比較的内実が豊かであったと思われる受領階級の彼女の家の財力を以てしても、貴重な紙を使い筆写に依っていた本は希少なものであり、手に入れ難いものであった。このことを考え合わせれば、この表現に籠められた作者の喜びがどれほどのものであったか、想像がつく。

- ・引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。

ようやく得た『源氏物語』を夢中になって読み耽っている、その何ものにも換えがたい思いを、「後の位」という、「ただ人」には望むべくもない女性の最高位を引き合いに、反語を使った強調表現で表している。

- ・光の源氏の夕顔、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、

『源氏物語』の描き出す世界に憧れ、いつの間にかそらんじるだけでなくその登場人物に自己を同化するほど、雅やかな物語の世界に没入していた作者の姿が「こそ」という一番強い係助詞によって表されている。

このように、この章段は『源氏物語』を軸とした作者の心の揺れがそのまま表現の上に特徴的に現れている。『源氏物語』に耽溺していた様をこのように書き記した上で「まづいとはかなく、あさまし」と嘆じている作者の思いを行間に見るべきである。

(4) 表現の違い(その三) — 願望表現

ここでは次に挙げた「ばや」「ゆかし」「見まほし」についてその表現の違いを考えたい。

〈門出〉

- ・物語といふもののおんなるを、いかで見ばやと恩ひつつ、
- ・ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさ

まされど、

〈源氏物語を読む〉

- ・紫のゆかりを見て、続きの見まほしくおぼゆれど、

まだ上総国にいる時の、物語を見たいという作者の強い気持ちを直截的に表現しているのが「いかで見ばや」である。この時、作者は都に上りさえすればと考えている。つまり、都と遠く隔たっているという地理的な条件のために物語は手に入らないのであり、作者の願いは都に上りさえすれば実現可能なことと捉えていたのである。このような実現可能な自己の願望を表す言葉として終助詞「ばや」が用いられている。

この「見ばや」に対し、依然として上総国で、ただ漠然と物語を読みたいという「何となく慕わしい、心が引かれて見たい」という作者の気持ちが「ゆかしさ」で表されている。ちなみに、作者が大いに傾倒していた『源氏物語』では、「ゆかし」の他に類義語として「いぶかし」「みまほし」「聞かまほし」を使い分けていたと考えられている。

そして、都に上り実際に物語を読んでゆく中で、願望の対象は「紫のゆかり」の「続き」という具体的なものとなる。「見まほし」という言葉が用いられているのは実にこの段階である。「まほし」は「まくほし」の変じたものであり、「まく」は推量の助動詞「む」の名詞形、「ほし」は「欲」であり、「見まほし」とは「見まくほし」つまり「見ることを欲する」と主体的に見たいという姿勢を表す言葉なのである。

このように、物語に対する願望という点では同様の表現ではあるが、使われている言葉の違いにより、その時々作者の気持ち、状況などを微妙に読み取ることができる。

(5) 表現の違い(その四) — 「心もとなし」

『更級日記』中に「心もとなし」の用例はさほど多くはない。「東路の道の果てよりも」の冒頭から「まづいとはかなく、あさまし」まででも、わずかに三例を数えるのみである。そしてその三

例が「門出」と「源氏物語を読む」の章段に現れているのである。

〈門出〉

- ・いみじく心もとなきままに、

〈源氏物語を読む〉

- ・いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆるま
まに、
- ・心も得ず、心もとなく思ふ「源氏」を、

名詞「心」に副詞「もとな」がついて形容詞となった「心もとなし」は、本来、期待や願望がなかなか実現せずに気持ちだけが先行してしまい、不安感や焦燥感を抱いている落ち着かない状態を表す言葉である。単に「じれったい」とか「待ち遠しい」と口語訳するのではなく、どのような状態から、「心もとなし」と感じているのかを考察する事により、語の意味をより正確に理解させるとともに、その折の作者の心情にも迫ることができるであろう。

ここにあげた「門出」の「いみじく心もとなきままに」は、姉、継母などといった人々が作者の思い通りに物語を語ってくれない(語ることができない)、その物足りなさから不満に感じて苛立っている状態を表していると考えてよい。次に「源氏物語を読む」での「いみじく心もとなく、ゆかしくおぼゆる」は、『源氏物語』を見たいという作者の願いが帰京したにもかかわらず容易には実現せず、待ちわびて苛立たしく思っている状態、そして、「心も得ず、心もとなく思ふ」は、話の筋が通らず納得がいかないでいらいと焦れて不満に思っている状態と見ればよい。

(6) 鑑賞

孝標女の四十年間にわたる回想の中で、少女時代の占める割合は大きい。一途に物語に憧れ、そして、その得がたさに焦燥に駆られている少女、人の世の生死・別れに心を揺らしている少女、その少女の姿を懐かしさといとおしさをないませにして惜しんでいる中に、晩年を迎えた作者の微苦

笑がちらりと見える。この「微苦」は、断片的に物語を聞き知った十三歳の時から五十歳を超え死を目前にするまで物語にこだわり続けた作者が、そういう自分を見つめて漏らしたものであり、四十年間という時の流れに濾過された嘆息でもある。「まづいとはかなく、あさまし」はこのような時の重みに支えられたつぶやきなのであって、単なる、一少女の憶れの告白や現実に目覚めた悔悟の表出ではなからう。

『更級日記』は「日記」とはいうものの、やはり距離を置いた作家の目、作家の態度で書いており、嘗ての自分を舞台の上に乗せ、動かしているかのごとき感がある。作者にとって良くも悪くも物語があってこそその人生であり、物語が「菅原孝標女」という人間の核をなしているのである。どのような作品であろうと、書くということは、必然的に自己を見つめ、自己の何たるかを知り、自己がどれほどのものであるかを思い知らされる行為である。たとい『源氏物語』の亜流であろうと、物語を書くことで作者自身は成長している。そして、物語によって成長を遂げた作者が、一人の女性の生を振り返ったのがこの作品である。作者にとって、物語とは享受するという単なる受身的なものではない。作者は書くことによって、物語と主体的な関わりを持ったのである。そのような作者の姿勢からすれば、片言隻語なりともゆるがせにはしなかったであろう。かく吟味されたものであれば、その微妙な表現の違いに籠められた作者の思いはいかばかりであったか。ならば、そこに思いを及ぼすのもよからう。

おわりに

ほとんどの古典作品は、読む都度その色合いが変わり、深みが増してくる。何とか古典の楽しさ、その奥行きへの深さの片端なりとも生徒に味わわせたいと思いつつも、むしろ、古典世界の重さ・厚みを思い知らされることが多い。せめて、将来、何かの折りに作品の一節を思い出し、再びその作品を手にする、そのような手掛かりを生徒たちに残すこと、それを期して努力することが古典を指

導する者に課せられた責務ではないだろうか。ところが現実には残念ながら、限られた授業時数の中で、語句の意味や文法など基礎的事項の理解や通釈に終始し、何が書かれているのか理解させようとすることで、読み味わうところまで手の回らない事がほとんどである。単なる通釈の授業に終わらせたくないため、様々な工夫により、作品を何とか生徒たちの近くに引き寄せようと努力している教員は多い。筆者自身は、文字として残されている作品そのものにこだわり、微妙な言い回しにこだわり、何とか古語で書かれた文学として扱おうと試みている。『徒然草』は短い章段が多く、自己を試されているかの如き感はなくもないが、その奥行はいかようにも深められる。また、『更級日記』に見える、何かに憧れ、それが生きることの全てであるかのような感覚は、生徒たちにとって難しくはあっても理解可能な範囲ではないか。

こちらの懐に合わせ、いかようにもその姿を変えてくる、それが古典の面白さであり、怖さではないかと考えている。書かれている言葉と向き合い、きちんと文章を読む過程を通して、読みを深めさせたいと考えている。

参考文献

- 「徒然草の鑑賞と批評」 桑原博史著、明治書院
- 「徒然草講座」 有精堂
- 「物語随筆文学研究」 山岸徳平著作集Ⅲ、有精堂
- 「詳解日本文学史」 桐原書店
- 「土佐日記・かげろふ日記・和泉式部日記・更級日記」
『日本古典文学大系 20 巻』 岩波書店
- 「方丈記・徒然草」『日本古典文学大系 30 巻』 岩波書店
- 「土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・更級日記」『新日本古典文学大系 24 巻』 岩波書店
- 「方丈記・徒然草」『新日本古典文学大系 39 巻』 岩波書店

教科書

- 明治書院「新精選古典」
- 東京書籍「精選古典」
- 右文書院「徒然草 説話（古今著聞集 十訓抄 宇治拾遺物語 古事談 今昔物語集）枕草子」